

後続世代からみた牧原民衆史について¹⁾

阿 部 安 成

†

八王子駅ちかくでおこなわれた牧原憲夫さんのご葬儀は春先のことだったと、なぜか、ずっと誤って思い起していた。もうさほど寒くはなく、コートを着ずに手に持っていたような肌感覚が確かに残っていた気がした。いまになってあらためて手帖を開き、それが7月のことだったとわかった。春先の暖かさどころかむしろ蒸し暑く、礼服を早々にTシャツへと着替えた帰り仕度を思い出した。

その日は、始発の新幹線の指定席を予約していたものの、出掛けにぐずぐずとして1本遅らせまた1本遅らせたあげく、大遅刻してしまった。知ったひとにそそくさと挨拶するなかで、牧原君が走っている、との声が聞こえた。掲げられた故人のいくつかの写真をみていた学友の往時を偲ぶ感慨が声となって口をついたのだろう。ご出棺にまにあい、故人をお見送りしたもののご家族にきちんとしたご挨拶もせずにお暇した。

大遅刻というばつの悪さが、時節の記憶違いにつながったのだろうか。わたしはどうにも、お亡くなりになった方を見送るといふとき、それがどうにもよくわからずに、心身がうまく反応しないことがある。

わたしは、牧原さんに初めてお会いしたときのようすを覚えている。それは、歴史学研究会大会全体会の準備会で、報告者である安丸良夫さんの準備報告へのコメントをお願いし、それをうけてご来会くださった、そこでお会いした。準備会終了後に、当時、歴史学研究会委員会の研究部長だった大門正克さんたちといっしょに例によって神保町にくりだし、自己紹介の段となり、コレラ騒動を調べています、といったわたしに、まだやることがあるの、といったたぐいのことを牧原さんはおっしゃった。初対面なのにずいぶんと辛

¹⁾ 本稿は、2019年10月26日に東京経済大学5号館2階E203教室でおこなわれた「牧原憲夫を語る会—著作選集出版を記念して」(以下、「語る会」とする)での「スピーチ」原稿を元としている。10名のスピーチメイカーに与えられた時間は10分とはいえ、各者のそれはテーブルスピーチというていどではないしっかりとした内容だった。本稿の論題は主催者がわたしに課したそのままとした。

滋賀大学経済学部

辣なひとだとおもった。全体会をめぐっては、歴研はナショナリズムで困ると安丸さんをひっぱりだす、とおっしゃったことが、これまた辛口の手厳しい、そして的確なコメントだとおもった²⁾。それから3年後には、歴史学研究会近代史部会運営委員のひとりとしてわたしは、金井隆典さんたちとともに、牧原さんに歴史学研究会大会近代史部会のご報告をお願いすることとなる³⁾。

そののち、研究会などでいくらかお会いするなかで、牧原さんたちが運営する困民党研究会による論集『民衆運動の〈近代〉』（現代企画室、1994年）の書評をわたしが書き⁴⁾、わたしの評を、穏やかに笑いながら聞いてくださった機会があったようにおもう。その困民党研究会が近代民衆史研究会として「再発足し、牧原も参加を続けた」⁵⁾が、途中から同会に入会したわたしは、そこでは牧原さんに会わなかったとおもう。

わたしが小平に住むこととなった1996年ころから、牧原さんのお宅で開かれていた研究会に出席するようになった。いわれてみれば確かに名まえのない研究会だったそこで⁶⁾、わたしはもっとも遅くくわわった、もっとも若い出席者だった。若輩の新参者ゆえ、わたしにとって、気軽な居場所になっていた。この時期に、牧原さんが編集委員のひとりとなった『20世紀日本館』（小学館、1999年）⁷⁾に、いくつかの項目を書くよう要請があった。

わたしの住まいが福生に移り、そして滋賀へいってしまっても、名がないながらも手帖には「牧原研」と記していた数か月おきのこの会にかよっていたものの、だんだんと足が遠のいてしまった。この会が2013年10月までつづいていたこと、そしてその始まりが1983年だったことを知って（前掲「牧原憲夫年譜」、なにより驚いた。

こうふりかえると明らかなおり、わたしは牧原さんと親しいといえるあいだがらではなかったし、師事したと看板をあげられるほどにその訾咳に接したわけでもなく、私淑したと表明できるよい読者でもなかった。

ただ、ご葬儀への大遅刻が消えないささくれのように残り、それを治そうとの手前勝手

2) 『歴史学研究』第638号増刊号（1992年10月）。

3) 『歴史学研究』第677号増刊号（1995年10月）。

4) 阿部安成「書評 困民党研究会編『民衆運動の〈近代〉』（『民衆史研究』第49号、1995年5月）。

5) 「牧原憲夫年譜」（藤野裕子、戸邊秀明編、牧原憲夫著『牧原憲夫著作選集』上巻、有志舎、2019年、所収。以下同書を、著作選集上巻、と略記する。下巻も同）。

6) 「語る会」での杉山弘の「スピーチ」（「小さな場を囲む—牧原宅での勉強会・困民党研究会など」）。

7) 同書のほかの編集委員は五十嵐仁、金子勝、北河賢三、小林英夫、山田朗。

滋賀大学経済学部

な理由で、要請された「牧原憲夫を語る会—著作選集出版を記念して」に登壇して「スピーチ」をすることをうけ、ほかの登壇者の演題をみずに、また、いただいた著作選集の「解説」をみないままに、牧原さんの『山代巴—模索の軌跡』（而立書房、2015年）をとりあげて話すことと決めた。

†

ちょうどいた「後続世代からみた牧原民衆史」というお題に沿って話そうとするとき、いくつもの前提となる課題をかたづけなければならないやっかいな事態につきあたる。「後続」というとき、いったい、なにの、どういう「後」なのか、それに「続」くとは、なにがどうなっているようすをあらわすのか、「世代」というのであれば、わたしをめぐってなにかそうしたまとまりが想定できるのか、「牧原民衆史」とは、「牧原」の「民衆史」か、「牧原」と「民衆史」なのか、あるいは「牧原」をめぐる「民衆史」か、それとも「牧原」ならではの「民衆史」ということなのか——といったいくつもの問いが発生するはずなのだ。

おそらくこのお題を課した主催者のあたまのなかには——とりわけ戸邊秀明さんのそこには、きちんと模範解答が整っていたこととおもう。わずか10分しか与えられない「語る会」においていくらか意地悪なといたくなるこのお題へのわたしの解答例を示し、答えあわせをしていただこうとの覚悟を決めた。

牧原さんは、たとえば、著作選集下巻「IV 歴史のなかの個人—田中正造と山代巴」⁸⁾収録の山代についての3編にまとめられた稿を、1981年から1998年までに発表していたとおり、そのお仕事としては、大阪事件研究会の成果発表（大阪事件研究会編『大阪事件の研究』柏書房、1982年）や困民党研究会の発足（1985年3月）にさきだって手がけられていた。1980年11月に、『山代巴文庫1 囚われの女たち第1部 霧氷の花』（径書房）が刊行され、翌1981年に「径書房・原田奈翁雄氏の読者への呼びかけにより〈山代巴を読む会〉が発足。世話人として会報の編集発行と関東地区読書会の開催に携わ」っていた（前掲「牧原憲夫年譜」）。

牧原さんが山代巴に「出会」ったときは1972年のことといい、1980年代には彼女をめぐる活動が始まっていながらも、彼女についての論述を一書にまとめる時期が2010年代な

⁸⁾ 著作選集編者のふたりには、この章題をつけるにさいして、鹿野政直『歴史のなかの個性たち—日本の近代を裂く』（有斐閣、1989年）の書名と方法がそれぞれの念頭にあったか。

滋賀大学経済学部

かばとなってしまった理由をわたしは知らない。ただ、「二〇一四年一月 山代巴さんの一〇周忌に」と末尾に記された『山代巴』の「あとがき」にある、「山代さんの歩みをわたしなりに書き遺しておきたくなった」をいう記述をみて、また、前掲「牧原憲夫年譜」の「2012年4月、気管支拡張症が進み、在宅酸素療法開始。呼吸器機能障害（3級）認定を受ける」との記載をみると、なにかしらの事情により執筆を後回しにしてきたところで、しかと覚悟を定めての上梓としたのかもしれない。滋賀に引き籠って10年——このころわたしは、牧原さんに会うことがなくなっていた。

牧原さんが最後におまとめになられたお仕事とってよい『山代巴』をめぐって、牧原さんがお亡くなりになられたあとに、あるひととふたりだけの小さな合評会をしようと試みたものかなわず終いとなってしまった。「スピーチ」にむけてあらためて、この『山代巴』という作品をくりかえし読んだ。

†

わたしの「民衆史」との出会いは、大学1年生のときの必修科目だった、確か「歴史学入門セミナー」という名称の講義で、担当教官は小谷汪之さん。歴史学の方法論にかかわる文献を読んでゆくセミナー形式の講義で、最初の1冊が、石原保徳『インディアスの発見—ラス・カサスを読む』（田畑書店、1980年）、ついで、川田順造『無文字社会の歴史—西アフリカ・モシ族の事例を中心に』（岩波書店、1976年）、そして、良知力『向う岸からの世界史—一つの四八年革命史論』（未来社、1978年）で、これらは、「世界史」という単元のテキストに小谷さんが指定し、ほかに和田春樹『農民革命の世界—エセーニンとマフノ』（東京大学出版会、1978年）もあがっていたか。

「社会史」という單元には、阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男—伝説とその世界』（平凡社、1974年）、網野善彦『無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和』（平凡社、1978年）があり、刊行されたばかりの阿部謹也、網野善彦、石井進、樺山紘一『中世の風景』上下（中央公論社、1981年）もあったか。

そして、「民衆史」として、色川大吉、鹿野政直、安丸良夫の名があげられていた。順に示された、『ある昭和史—自分史の試み』（中央公論社、1975年、中公文庫、1978年）、『日本近代化の思想』（研究社出版、1972年）、『神々の明治維新—神仏分離と廃仏毀釈』（岩波書店、1979年）との著作案内には、大学1年生用という配慮があったのかもしれない。講

滋賀大学経済学部

義をとおして、もちろん、それぞれの、『明治精神史』（黄河書房、1964年）と『新編明治精神史』（中央公論社、1973年）、『資本主義形成期の秩序意識』（筑摩書房、1969年）、『日本の近代化と民衆思想』（青木書店、1974年）も教えられた。

「民衆史」——^{たみ}民の衆の歴史とはいえ、さきにあげた3名の歴史学研究者はいずれも、単著でひとりの人物を叙述する評伝をあらわしている。色川さんは『北村透谷』（東京大学出版会、1994年）、鹿野さんの1冊をあげるとするとひとまずは『沖縄の淵—伊波普猷とその時代』（岩波書店、1993年）、安丸さんには『出口なお』（朝日新聞社、1977年）がある。また、彼らは、安丸さんよりは色川さん、色川さんよりは鹿野さんという順で、歴史のなかに人物を描く、あるいは、人物を軸として歴史をあらわす論考が多いといえる。

こうしたようすから、「民衆史」という歴史叙述のひとつの型として評伝があるといってもよい。とはいえもちろんのこと、対象とする人物ひとりで完結してしまう歴史叙述はあり得ず、対象とするものの生をその時代と土地と、そしてそれらがかかわりあうひとひととの関係において描述しなければ歴史をとらえたこととはならない。

†

牧原さんの山代の名をつけた単著も、その後注をみれば明らかなおり⁹⁾、歴大な数の人びとを登場させたていねいな叙述がなされている。

「民衆史」と重なりあいがある研究の領域または方法として、運動史、社会史、生活史、などがあり、それぞれの名を冠した研究会や叢書のたぐいはいくつもあるだろう。たとえば、研究会活動の記録や論評として、喜安朗ほか編『歴史として、記憶として—「社会運動史」1970～1985』（御茶の水書房、2013年）や谷川稔ほか編『越境する歴史家たちへ—「近代社会史研究会」〈1985-2018〉からのオマージュ』（ミネルヴァ書房、2019年）があり、逐次刊行物や叢書には、『社会史研究』第1号～第8号（日本エディタースクール出版部、1982年10月-1988年3月）、『日本の社会史』全8巻（朝尾直弘ほか編、岩波書店、1986年-1988年）、『民衆運動史』全5巻（新井勝紘ほか編、青木書店、1999年-2000年）をかぞえ、かつてあった、西岡虎之助『民衆生活史研究』（福村書店、1948年）、南博ほか編『近代庶民生活誌』全20巻（三一書房、1984年-1998年）、草間八十雄『近代下層民衆

⁹⁾「語る会」での「スピーチ」（「山代巴を読む会」、牧原さんの山代巴研究・評伝について）でも注の多さについて指摘があった。

滋賀大学経済学部

生活誌』全3巻（明石書店、1987年）などといくらか切断されたところで近年では、「ライフヒストリー」や「ライフストーリー」の系列として「生活史」が論じられたり記されたりしている（たとえば、『At プラス—思想と活動』28（太田出版、2016年5月）が「生活史」と題した特集を組んだ）。

「民衆史」をかかげた活動としても、牧原さんもくわわった「近代民衆史研究会」があり、それよりもまえから、「民衆史研究会」（学会誌として『民衆史研究』を1962年創刊）が、また、「民衆思想研究会」（学会誌なし）が¹⁰⁾、ある。後者は名称にとくに「史」を入れなかったところに意味があるとのことだが、その理由や意義を創設者のひとりから聞く機会をわたしは失ってしまった。

こうしてみると、牧原さんの『山代巴』という作品は、研究史や史学史をみわたしたところでわたしたちの視野に入る、民衆史、運動史、社会史、生活史といった領域におよび、またそれらの様式をとりこんだ叙述であり、とりわけ、民衆思想研究における重要な成果なのである。

†

その理由を説くにあたってまずは、牧原さんが参照した、山代と牧瀬菊枝が編んだ『丹野セツ—革命運動に生きる』（勁草書房、1969年）の刊行経緯をめぐる山代の言をみよう——丹野はみずからの記録がつくられることを拒んだのだが、しかし、山代たちが「伝記ではなく、座標軸をつくるためだ」と納得させて同書を刊行したという¹¹⁾。この山代の表現

¹⁰⁾ 安丸良夫「史料に問われて」（『日本近代思想大系別巻付録月報』24、1992年4月）。

¹¹⁾ その元をたどると、「母たちは戦争中おとなであった世代としての戦争責任の追究まではできませんでした。母たちが自分の歴史を客観的に書くにはどうしたらよいか。〔中略〕多くの母たちは時代の激流にもまれ、押し流されてきたので、ひとりでは自分を立体的に書くことはできない、一つの座標との比較でなければ、自分の歩みを客観視し、立体的に描きだすことはできないのではないか。そのための「動かぬ座標」として、山代は丹野セツの名を挙げました」、「ほんとうに丹野さんにとっては、私たちの座標になることは大きな勇気のいることで大変な負担をおかけしたのだと思います。ですから、何度もくり返しますが、この記録は丹野さんの伝記ではなく、あくまでも私たちの壁を破るための座標です（牧瀬）、「そうだと思います。丹野さんはあくまで、私たちの戦争反省の座標だった。座標の実体が、貧しい坑夫長屋での生い立ちをもち、南葛での日本の革命運動の黎明期の闘いをもち、十年の獄中生活あり、偽装結婚あり、宮城遥拝拒否ありで、惨たんたる生活を含みつつも、暗くはなく、ぐちにもならず、泣きごとにもならなかった。その点がこの記録の大きな収穫だったと思います」（山代）（前掲『丹野セツ』「はじめに」、「記録を終わって」）。

滋賀大学経済学部

にならって、牧原さんの『山代巴』という作品がどういう座標軸となるのかをのべよう。

労働と運動をふくめて人びとの生活をとらえると、その生活に即して、その生活を記そうとするとき、あれやこれやの用語を「生活語への翻訳」をおこない、あわせて比喻や表現の仕様を学んだうえで、「民話」や「生活記録」¹²⁾ という文体を得たと牧原さんがとらえてみせた山代巴を、牧原さんはさらに、その山代を史料として扱い、その山代という史料に即して、彼女が獲得した語、比喻、表現、文体を評伝という論述におきかえて、歴史学の界域に突きつけてみせたといえる。これはべつにいえば、山代がおこなった作業と、牧原さんが山代をとおして果してみせた歴史学の事業とが、わたしには重なってみえるということなのだ。

では、この『山代巴』という作品をあらわした牧原さんが、歴史学の界域においてどういう座標軸となるか。

一見したところ、「近代日本の文明化と国民化」と題された著作選集下巻に山代についての稿を収録したようすは、落ちつき悪いとの印象をもってしまう。1901年に生まれ2004年に亡くなった彼女が、「近代日本」とどう切り結ぶのかとの疑問である。他方で牧原さんは、「一九七〇年代の山代は、封建的なものが払拭され近代化が進めば個人が尊重され自由な社会になるという期待や、生産力の発展が歴史を進歩させるといった社会主義の通念からはなれて、被害と加害、孤立と抑圧の連鎖を増幅する「近代」を批判する」との理解を示している。著作選集下巻の主題を「文明化」と「国民化」としての近代とうけとめると、牧原さんが「近代」を批判する思索者とみた山代についての稿を著作選集下巻に収録したことは、編者ふたりの適切な判断と見識だった。

「主体」を歴史に活かす叙述を試みるとともに、それを「subject」としても論じる¹³⁾との重なりあいが、わたしのなかでは山代と牧原さんとで重なりあう二重映しとなっている。牧原さんは、歴史学の界域において、歴史の「主体」に即した近代批判という位置にある、とわたしはおもう。

そう位置づけられる牧原さんの『山代巴』という作品は、ミシェル・フーコーも、アン

12) さらには、「生活記録の壁を破る方法」(前掲『丹野セツ』「はじめに」)をもふくめて。
13) 著作選集下巻「VI 国民国家論への問題提起」の第1節第2項の論題が「subjectとしての国民」。もとより山代が「subject」という用語を用いたわけではない。ただし牧原さんは『山代巴』第3章後注*37に中井正一の「Subjectの問題」(1935年)などをあげて「実践的主体性」を論じている。

滋賀大学経済学部

トニオ・グラムシも、ルイ・アルチュセールも、アラン・コルバンも参照したり引用したりしてはいない¹⁴⁾。ここには、あくまで山代巴に即いて立論し、叙述するという厳とした姿勢がつかぬかれているとみえる。

†

『山代巴』という牧原さんの作品には、「模索の軌跡」との副題がつく。「模索」の熟語に元は、手偏の「摸」が用いられ、それは、「さぐ-る。手さぐりする」の意であり、「索」には「なわをたぐり寄せるようにして、なにかを求めるの意味」¹⁵⁾があるという(『新漢語林』第二版、大修館書店)。山代は手探りでなにを手繰り寄せようともめたと牧原さんはみたのか——それは、「新たな抑圧と対峙できる主体性の模索」であり、そのための手技として、「自己客観化」、「労働者一人ひとりが自発的に考え一步を踏み出す力を育てなければファシズムとは闘えない」、「自分でなおすようにさせる」(傍点引用者)、「自分のおかれている状況についての的確に表現できる自己表現の力を身につけていかなければならない」、「自立的連帯」があったと、牧原さんは山代にみた。いずれも、とてもやっかいだ。なぜか。

自分で自分自身を「客観化」する面倒くささやむつかしさ鬱陶しさは、だれにも覚えがあるだろう。「一人ひとりが自発的に考え一步を踏み出す力を育て」というとき、その主語はなにか、それが「わたし」であれば、やはりさきの「自己客観化」とおなじ難儀となるろうし、それが「わたし」以外のだれかであれば、「自分でなおすようにさせる」という使役となってしまう。自分で自分自身を「表現」しようとするとき、ひとはどういった自前の語、比喩、表現、文体といった言葉をもっているのだろうか、わたしたちはだれもが、

14) さきの「subjectとしての国民」ではフーコーをふまえた議論が展開しているし、自宅での「研究会の問題関心は近代社会の再検討にあたり、日本史のみならず広くヨーロッパ近代史の文献を読む」んでいた牧原(前掲「牧原憲夫年譜」)であるにもかかわらず、とひとまずいおう。

15) まるでべつなことがらにここでふれると、かつてわたしが調査と研究のフィールドとしていた癩そしてハンセン病をめぐる国立療養所には「盲人」のための「盲導索」という設備がある。これには「柵」ではなく「索」という語が用いられている。その理由をある盲人会の代表に尋ねたところ、彼もその理由を知らなかった。「索」の語を当てた理由は単純で、あれは、あちらとこちらを隔てる「柵」なのではなく、目がよくみえないひとが「なわをたぐり寄せるようにして、なにかを求める」ための設備として、当事者が設置を請い、それが実現し、「索」の語をもって呼ぶこととしたのだろう。彼ら彼女たちがもめた「なにか」とは、自分の居所を知ること、自分のゆく先の手がかりを得ることである。

滋賀大学経済学部

出来あいの、使い古された、耳に馴染みのある言葉を音声再生機のごとく発しているにすぎないのではないか。「自立」しつつ「連帯」する、「連帯」のために「自立」する、これもまたどうにも難儀だ。どれもまた、反語矛盾といいあらわせそうでもある。

こうした語義と実践においてもともと困難がつきまとうことどもを遂げる試みを¹⁶⁾、労働と運動と生活のなかの思索において山代がみずからに課し、それを果たそうとした、と山代にみた牧原さんはまた、わたしには、おなじ課題をみずから担い続けてきた思索者だったと、感じられる。「模索の軌跡」は、山代と牧原さんの生に重なりあうのである¹⁷⁾。

牧原さんは「両義性」という言葉を使わない、とあるひとから聞いたことがある。とはいえ、口頭でも文章でも牧原さんのその語の使用歴に接した気がする。「自立的連帯」もまた概念における両義性のあらわれといえるかもしれない。ただ、牧原さんはそうした語義において相反する怖れが濃い複数の語をただならべて静態の歴史を記そうとしたのではない。そうではなく、牧原さんの思索をあらわす重要な語である「せめぎあい」をとりあげれば、「自己客観化」においても、自発性を育てる—自分でなおすようにさせる、という関係をとおした実践においても、「自己表現の力を身につけ」るとの文体と言葉の鍛錬においても、そして「自立的連帯」という継続する課題においてもまた、「せめぎあ」うという動態の叙述を「模索」しつづけて歴史を書きあげてみせるひととして牧原さんは生き¹⁸⁾、そうした牧原さんならではの歴史叙述がわたしたちのまえにあり、牧原さんのまえには山代巴の「模索」があったのである。

山代は、あえて術語をとりだしてあてはめれば、同時代の「民衆」の奥底にまで食い入ろうとし、そこから「思想」なるものを手繰り寄せ、確と攫みとったそれらを書きあらわし、「記録」として残した。同時代の「民衆思想」の記録者として山代がいて、その果実の種子を継いで、歴史の叙述とそれをめぐる思索を、いくにんものひとたちと、いくつもの場をとおして遂げてみせた、肩書とは縁遠いひとが、牧原憲夫さんだった。

16) だからこそ、巴が夫吉宗から教わったという「質問の出る雰囲気」をつくるという努めは重要である。

17) さきにふれた「スピーチ」(「山代巴を読む会」、牧原さんの山代巴研究・評伝について)では、牧原さんは山代の「伴走者」だったという形容があった。

18) 牧原さんの議論をめぐる「プロセス」「せめぎあい」への着目は、すでに大門正克さんによって示されている(同「追悼 牧原憲夫さんとのぶつかりげいこ」『評論』第205号、2016年10月)。

滋賀大学経済学部

†

「語る会」が開かれた10月26日は、2019年のこの日からかぞえて141年まえに、神奈川県でひとりの人物が殺害された真土村事件が起こった日だった。わたしはかつて、『民衆史研究』に、真土村事件についての稿を寄せ¹⁹⁾、それを牧原さんにお送りしたところ、葉書いっぱい小さくてていねいな字で論評が記された返信をいただいた。抜刷などをお送りすると牧原さんは、かならず返信をくださった。そこには、「癒しの民衆史」との評言があった。「癒し」という言葉が大嫌いなわたしは、牧原さんともあろうひとがなんということだとおもった。

だがいまおもえばそれは、「癒し」という通俗の語とはべつに、どういう、いくつの語や考えをならべて、自分が書きあらわしたことをもういちどとらえ直すとうなるか、よくよく考えてみよ、という論しがそこには籠められていたようにおもう。だがいままだ、その宿題は果たせていない。

「語る会」では、牧原さんのお若いとき（ご幼少のみぎりの、といえるころも）の写真がプロジェクタで投影された。そのなかに、牧原さんの走っているお姿が写る1葉があった。ご葬儀の参会者に感嘆の声をあげさせたそれだったのだろう。

「語る会」が終わってあらためて著作選集下巻を手にしてみると、著作選集下巻カバー裏表紙には、「著者が長きにわたって関心を持ちつづけた山代巴に関する論考には、牧原史学の発想と方法が色濃く反映されている」と記されてあった。この記述が編者によるのか、同書を出版した有志舎の永滝稔さんによるものなのか、わたしにはわからない。そうではあっても同書はその装丁においてすでに、牧原さんにとっての山代巴を的確に、かつ簡潔にいいあらわしていたのだった。著作選集下巻を手にして裏表紙をみればすぐに、山代を論じる牧原さんをどう読めばよいのかわかるのだ。

また著作選集上巻所収の「牧原憲夫年譜」には、牧原さんのおつれあいの暁子さんが執筆した「付記」があり²⁰⁾、「ここに著作目録と年譜の作成に協力する機会を与えられ、牧原憲夫の「模索の軌跡」をたどることができたことに感謝いたします」と記してあった。

19) 阿部安成「1878年真土村事件の終幕—事件後をひとびとはいかに生きたか」(『民衆史研究』第54号、1997年11月)。

20) 「語る会」では「牧瀬さん」と呼ぶひともいて、暁子さん自身も両姓を名乗るときがあることについて(当日配布された資料集の表紙に記されたプログラムにも「4. ご挨拶……牧原(牧瀬)暁子」とあった)、「瀬に原はかえられない」とおっしゃっていた。

滋賀大学経済学部

山代と牧原さんとの重なりあいは、両者のみぢかにいたひとにとっては、おのずと明らかだったのかもしれない。

「語る会」が始まり、「開会の挨拶」につづいて、本書編者おふたりのひとりである藤野裕子さんが、「2. 著作選集発刊の経緯と内容の紹介～研究と生涯の軌跡にそくして」と題された報告で、本書編集は刊行まぎわまでつづく慌ただしい作業だったとふりかえり、記しておくことができなかつた牧原さんについてのわずか数文字の文言として、所属なし、だったか、所属していない、だったかがあったとのべた²¹⁾。わたしは、いくつもの研究会や読書会や読む会を開いた牧原さんのまわりには、つねにいくにんものひとたちがいて、大学や研究機関に長期にわたって所属しなかつたとはいえ、牧原さんが属するところはいつもあったのだとおもう。「語る会」でのどなたかの「スピーチ」が紹介された著作選集献呈への謝辞だったかに、牧原さんは孤独を恐れなかつた、という評言もあつたとおもう。牧原さんはひととの交流を絶やさずに、むしろ、世にいう肩書などというものを必要としない生を暮らしたのだといったほうがふさわしいとおもう²²⁾。

2019年10月26日はわたしにとって、ご葬儀での大遅刻をお詫びし、あらためてご挨拶をし、こと新たに、牧原さんとむきあう機会となった。わたしだけでなく、さきにみた「付記」に記されていたとおり——「願わくばこの選集が後に続く若き研究者のみなさんに一石を投じ、大いに議論していただく材料となりますように」——そしてまたこれは「語る会」で本書編者のおふたりがくりかえしのべていたところでもあり、多くのひとが牧原さんの著述がとりわけ若い人びとに読まれることを願っている。牧原さんの「模索の軌跡」が歴史学の論点となるよう努めてゆくことが、わたしたちの牧原さんへの応答だとおもう。

(2019年11月26日脱稿)

²¹⁾ 後日、藤野さんに確認したところ「所属のないまま」とのこと（2019年11月15日受信電子メール）。

²²⁾ 前記メールでの藤野さんの教示により「語る会」当日配布資料収載の牧原憲夫「大阪事件研究会からの十年」に「地方公務員であった私が体調をくずして退職してからこの十年間、「肩書ナシ」のまま歴史研究を続けてこられたのは、大阪事件研究会の縁で仕事と発表の場を得たからでした」の一文があるとあらためて知った。それはご本人の感慨でもあつた。